

秀 賞



自分らしさの探究

福島県福島市立信夫中学校

三年 中村 理 紗

「りさちゃんって将来、大物になりそうだよね」「りさちゃんって個性的だよね」と私は人に言われる。しかし、言われるようになったのは日本に帰国してからだった。当時の私は、そんな当然のことをなぜわざわざ言うのか理解できなかった。

私は幼少期に中国に住んでいた。そこでは子は宝。誰もが平等で、大人から見たら変に感じるような行動も、その子の個性と受け入れられていた。そのような環境で育ったから、「あなたは、こんな子でしょ」と言われたこともなく、日本に帰国したばかりの私は、近い両国の大きな差に驚いていた。しかし、私は、人に大物になれると言われ、嬉しかった。自分の明るい未来を信じて疑わなかった。

思春期が訪れ、事態が変わった。言葉の裏の含みを理解するようになった。言われて嬉しかったあの言葉を言われると、鋭いナイフで心をズタズタにされたような気分だった。何をして人も人と違う私。人前でほめられることも、周りと違うと言われる私。人前で素直に喜べなかった。「省エネモード」と称して仲の良い友達とも、距離を置いた。あの言葉が言われることは無かったけれど、一人になりたかった。一人なら、誰にも傷つけられない。こうして私

は、「自分らしさ」を閉じ込めた。

転機が訪れたのは昨年の夏だった。私は、一週間、オーストラリアへ行き、現地の学校生活を体験した。現地の授業は、ディスカッションが中心だった。しかし、日本のように水を打ったようなディスカッションではなかった。みんなが意見を言い、活発に話し合うため、先生はほとんど話さない。みんなが課題に真つすぐ向き合い、ディスカッションを通して、互いの考えを深めていくような授業だった。

また、ディスカッション以外の授業でも、発言が絶えなかった。もし、日本で間違ったことや的外れなことを言ったら、馬鹿にされる。授業中だけでなく、周りが飽きるまでずっと。そのような光景を見てきたから、考えがあるのに言えないときがある。しかし、オーストラリアの学生は、違う。誰かが突拍子もないことを言ったとき、理解できなくても馬鹿にすることはしない。むしろ、その考えを理解しようと質問する。そして、授業の雰囲気がいよりの良くなる。私が受けた授業はほとんど、生徒主体の授業だった。現地の学生と同じ目線で授業を体験して、感じたことがある。まず、彼らは、自分の意見を言うことを恐れていない。もう一つは、自分とは違う意見の人がいても、理解し、受け入れようとしている。それらのことに気付いたとき、私は、まず、私が自分を受け入れられていないことを知った。

そこで、私は自分を変えようとした。積極的に現地の学生と話した。すると、私は、オーストラリア人の友人ができた。周りに自分を受け入れてもらえた。意思疎通がおぼつかなくとも、友人ができたことで自信がついた。自分らしく生きて、傷つくことは怖くないと思うようになった。自分の個性を受け入れられるようになり、他人の個性も受け入れられるようになった。人と関わるのが辛くなくなった。

もし、今、「個性的だよね」と言われても、私は笑顔で「ありがとう」と言えるだろう。

このような言葉がある。

「絶えずあなたを何者かに変えようとする世の中で自分らしくあり続けること。それがもっとも素晴らしい偉業である。」

以前の私のように、周りに合わせたり、傷つきたくないために「自分らしさ」を閉じ込めている人が日本では多いように思う。しかし、私たちが年若い、各々の人生を振り返ったとき、周りに流されてばかりで、「自分らしさ」に欠けていると感じる人は、果たして幸せだったと言えるのだろうか。誰でも、傷つくのは怖い。それでも、傷つかなかった喜びは、自分らしく生きられなかったという悲しみよりも大きいのだろうか。私にはそうは思えない。

人生は、私たちに平等に与えられた一回限りのチャンスだと思う。人として生を受けたからこそ自分らしく生きることが困難を極めるのだ。そうだとしても、私は、「もつとも素晴らしい偉業」を成すために、これからは、「自分らしさ」の探究を続けていく。